

5月の旅行

2024-5-22 野口幹夫

先週は久しぶりの新幹線の旅に行くことができた。友人が阪大の同窓会を京都・大阪で企画してくれて、それに誘われて出かけたのだ。京大阪までの新幹線の旅は慣れているつもりだが、それでも車窓に飛び行く沿線の風景は見飽きることはなかった。何度乗っても同じ風景ではない。はっきりと変わっているのを見つけるとワクワクする。やはり旅は人間をその都度新しくしてくれるとの実感をおぼえる。

友人の世話で泊ったのは京都洛北鷹峯のホテルだった。花札の8月の絵 黒い山から丸い月の図はこの地の風景だと書いてあった。ホテルの庭が有名で北山杉を何本も移植した風景は見事だった。



集まった同窓生は6人。二人は奥さん同伴できたので8名の記念写真だ。40人いた同級生の中でしぶとく生き残っている仲間だ。

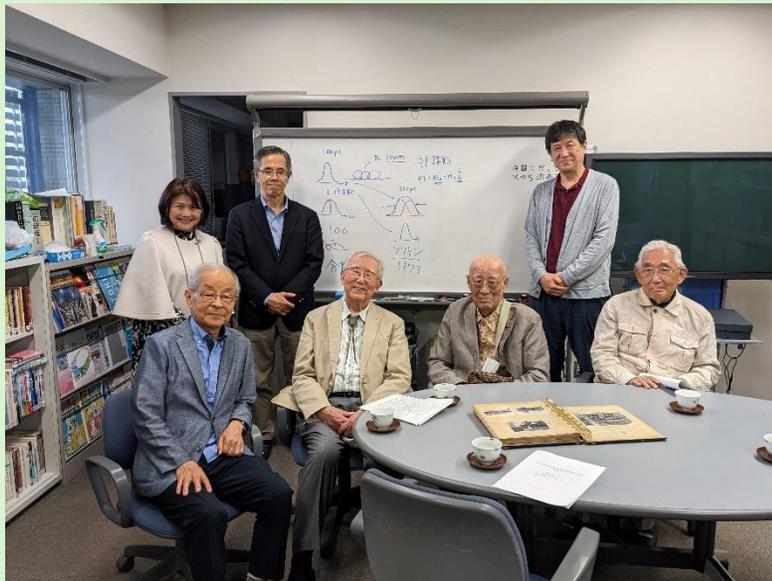


翌日は大阪に行き、阪大の新しい姿の見学ができた。我々が学んだ学舎はもうない。阪大は昔タコ足大学といわれあちこちに分散していたが、今は万博跡地の吹田丘陵に広いキャンパスを持ち、ここに医学部理学部工学部がほぼ集中している。

この他に新しく電車路線が延長されて都会が生まれつつある箕面市に外国語学部が置かれている。25か国もの世界言語が研究されているとのことで 世界に開かれた窓という感じで若者たちが群れ集まって勉強していた。我々の心にもフレッシュな風が吹いていった。

我々を、案内してくれたのは、初対面の女性だった。自分で阪大所有の車を運転して案内してくれた。彼女は大阪大学連携ファンドレイザーという職名で、大学への寄付基金を集める役目をもった職員だった。国立大学は法人化された中、国家予算が減る環境で、このような役職者を大勢使い、企業との共同研究を進めて資金をあつめ、卒業生からの寄付金も集めているのである。

時代の変化を感じた旅であった。



そして来年は大阪万博でまた集まろうと約束して別れた。この1年くらいはこの連中は生き残れるとの確信がある。

以上